

氏名 鈴木 のぞみ
ヨミガナ スズキ ノゾミ
学位の種類 博士（美術）
学位記番号 博美第674号
学位授与年月日 令和4年3月25日
学位論文等題目 （論文）事物の記憶 事物が孕む潜像を顕在化させる媒体（メディアム）について
て
（作品）The Rings of Saturn
Other Days, Other Eyes

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 時啓
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	林 卓行
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	鈴木 理策
（副査）	東京藝術大学	名誉教授	（美術学部）	伊藤 俊治
（副査）	東京工芸大学	准教授		小原 真史

（論文内容の要旨）

本論文は、写真の原理を通して外界の事物が孕む潜像を顕在化しようと試みた自作について考察し、ここで実現しようとしている〈事物の記憶〉とは何かを明らかにするものである。ここでいう事物とは、自然物や人工物を含めた事物 (object) のことを指す。また、記憶とは、心理学において脳が物事を記録し、それを保持し、その後想起することである。したがって、通常、記憶とは生物が保持するものであり、事物は記憶を持たないとみなされるが、では、〈事物の記憶〉とはいかなるものか。筆者の仮説は、人間という主体が自身にとっての客体である事物にまなざしがあると感じ、事物もまた主体となるような世界を仮想することで〈事物の記憶〉を見出すことができるというものである。そうすることで、人間ではない事物が保持する〈事物の記憶〉が存在すると考えられるのではないか。

本論では、〈事物の記憶〉について思索するにあたり、写真の原理における「潜像」をその糸口とする。潜像とは、露光によって写真感光層に生ずるが、現像するまでは目に見えない像を指す写真用語である。すなわち、光によって「顕在」化される物理的な変容可能性とは、廻行的に事物に「潜在」している「潜像」であると捉えることができるのではないか。そのような潜像は、われわれの身近な事物のそこかしこに見出すことができる。例えば、日常の事物に生じている小穴投影現象による倒立像、光によって投げ出される影、滑面への光の反射、ガラスにおける光の透過や屈折などの物理的現象である。本論では、これらの現象により、われわれの日常に見出すことが可能な事物に潜在する像を〈事物の記憶〉と呼ぶ。そして、自作を通して〈事物の記憶〉を顕在化させる媒体と制作方法について論じていく。

第1章では、筆者の独自の概念である〈事物の記憶〉とはいかなるものか、本論において前提となる部分について考察する。まず、自作において〈事物の記憶〉としてイメージを提示するうえで、事物を支持体とした場合にそこに描かれる像を得るための媒体が絵画から写真へ移行した経緯について述べる。ついで、写真黎明期の言説について概観し、写真は自然それ自体によって自動筆記され、人間の手を介さずに像を得られることから客体的な媒体であることを示す。これらを踏まえて、写真とは指標 (index) 記号であるとしたチャールズ・サンダース・パースの概念を美術批評に用いたロザリンド・E・クラウドの「指標論」を自作に援用する。クラウドによると、指標的に作品を制作する手続きは、作者の介入を打ち消すという。したがって、指標的な方法で制作することで客観的に〈事物の記憶〉として像が得られると考えられる。そのうえで、これまで筆者が取り組んできた支持体と指示対象が何であるかという観点に従って「影」「穴」「鏡」「窓」「レンズ」という項目に分類する。

第2章では、〈影と写真〉を主題とし、光の投影による潜像について考察する。まず、影はわれわれの身近にある原初的な像であることを概観する。そこから、窓辺に落ちる影のフォトグラムを手紙の形式を借りてジアゾ感光紙に試みた自作《Letters of Light》について考察する。ついで、ジュゼッペ・ペノーネが木材から樹木の年輪を化石のように掘り出す一連の作品と写真の関連について述べる。そして、森山大道が「写真は光の化石である」と述べた写真論について梅津元の論考を通して言及する。そこから、日常に存在する影をサイアノタイプ感光液と小石を用いて標本のように採集し、顕在化した自作《Specimen of Shadow》が〈事物の記憶〉として捉えられるか考察する。

第3章では、〈穴と写真〉を主題とし、小穴投影現象による潜像について考察する。まず、穴が穿たれている事物には「小穴投影現象」が生じることについて概観する。ついで、アンリ・ベルクソンが『物質と記憶』において述べた、「写真は事物のまさしく内部で、空間のあらゆる点に向けてすでに撮影され、すでに現像されている」という言葉にもとづき、山中信夫の《5つの映像》という作品について参照し、小穴投影現象を用いた自作《光を束ねる》について言及する。そして、中平卓馬の「事物の見返す視線」という言葉とともに、穴のあいた事物による眼差しについて考察する。それらを踏まえて、自作《Monologue of the Light》の制作プロセスにおいて、穴によって顕在化される像は適切な支持体の選択やサイズの決定を経ることで〈事物の記憶〉と捉えうると示す。

第4章では、〈鏡と写真〉を主題とし、光の反射による潜像について考察する。まず、鏡像がわれわれにとって原初的な像であることを示し、鏡を見るという経験について概観する。ついで、ロラン・バルトが述べた「それは一かつて一あった」という写真が予兆させる被写体の不在について述べ、「写真を見る」という経験によってわれわれは人間不在の世界を享受したことについて言及する。そして、ジェフリー・バッチェンのヴァナキュラー写真論における、写真に加工が加えられることで被写体が二重に指示対象として現される「インデックスの二重化」について参照し、事物と写真を同時に見るということは、視覚と触覚による二重性と過去と現在の時間による二重性が知覚されることであると考察する。そこから、最初の写真であるダゲレオタイプが「記憶を持った鏡」と呼ばれたことに着想を得て、鏡がかつて反射していたであろう像を鏡それ自体に定着した自作《Mirrors》について述べ、事物としての写真がわれわれにもたらす作用について考察する。

第5章では、〈窓と写真〉を主題とし、光の透過による潜像について考察する。まず、レオン・パッチェスタ・アルベルティの『絵画論』以後、絵画とともに写真は窓のメタファーを用いて語られてきたことを示す。バルトによれば指向対象が密着している写真の本質と同じように、窓と窓越しの風景は切り離せないという。そこから、窓越しの風景が窓ガラスに定着された状態で割れているルネ・マグリットによる作品《野の鍵》を参照し、窓ガラスを支持体として窓越しの風景を直接定着する写真制作を試みた自作《窓の記憶》について考察する。また、制作において撮影時間を選択するうえで恣意性をなくすため、小穴投影現象による長時間露光によって像を定着した自作《Trace of the Light》について言及する。そして、ボブ・ショウのSF小説における「スローガラス」という光の透過を遅らせる空想上の発明品と自作《Other Days, Other Eyes》の類似性を示し、一軒の建物の窓に異なる時間軸の像を定着し、さまざまな時間が交錯する自作《The Light of Other Days》について考察する。さらに、可動性を持つ船に設えられた舷窓は、そこから眺められていた対象を特定することが難しい反面、推測する余地があることを示す。

第6章では、〈レンズと写真〉を主題とし、光の屈折による潜像について考察する。言語学者のロマン・ヤーコブソンによる「転換子 (shifter)」という概念を美術批評に用いたクラウスの理論によれば、転換子とは、ただ空虚であるために指示対象をあてがわれるのを待つ言語記号である。そこから筆者は、見る対象が存在しなければその意味を為さない光学機器 (レンズ) とは転換子であると捉え、その概念を自作における支持体と指示対象との間にある関係性に援用し、対象物を推測する。また、この制作プロセスにおいては筆者による推測や恣意性が生じることから、ウジェーヌ・アジェの写真に見られる個の自己表現を超えた目錄的性質を自作に援用することで客観性を示す。そして、事物の見ていた対象を推測するうえで、梅津元の造語である「擬物化」という言葉を通して事物のように見る態度について考察する。さらに、W・G・ゼーバルトの写真とテキストによる記憶の技法とともに、ヴァルター・ベンヤミンによる過去を通して未来を見つめる眼差しについて参照する。以上を踏まえて、筆者の博士提出作品である自作

《The Rings of Saturn》と《Other Days, Other Eyes》における実践が〈事物の記憶〉として捉えられる可能性について示す。

以上の考察から結論として、事物が主体となる世界について仮想的に思索する際、客観的な取捨選択を行うことによって、作者が主体を退隠し、人間が写真によって事物が見ている世界を顕在化することができると考えられる。時代の目撃者である事物からどのような対象物が眺められていたのかを人間が推測する行為は、人間が事物のように世界を見ようとする態度である。現代の多様な視覚芸術表現において〈事物の記憶〉を顕在化する写真とは、人間を中心として構築された世界を見つめ直す視点を模索する行為であると位置付け、結びとする。

(論文審査結果の要旨)

本論文は著者が自作について、「事物の記憶」を鍵概念として考察を加え、その成り立ちを明らかにするものである。

著者によれば〈事物の記憶〉とはつぎのように定義される。すなわち、心理学的に記憶とは生物の脳が物事を記録し、それを保持し、その後想起することとされるが、このような記憶の概念が、まず脳を持たない無生物である諸々の事物にまで拡張される。さらに著者は、人間という主体が自身にとっての客体である事物にまなざしがあることを感じ、そこから事物もまた主体となるような世界を仮構できるのだとする。そしてそのような世界において、人間ではない事物が保持する〈事物の記憶〉が存在すると考える。以上のような立場から、著者は自作において、写真術における露光によって写真感光層に生じはするが現像するまでは目に見えない像、すなわち「潜像」をそうした「記憶」を具現化し、また可視化するための糸口とする。そこから本論はすぐれて写真論としての性格を帯びることになる。

続く本論の構成はつぎのようになっている。まず著者は、制作の前提として写真の指標(index)的性質についての議論をロザリンド・クラウドから援用し、その性質を活用した作品制作の方法は「主体の介入を打ち消す」と主張する。その上で、それぞれの自作を構成する核となる「影」、「穴」、「鏡」、「窓」、そして「レンズ」といった要素と、この「主体を打ち消す」効果との関わりが論じられてゆく。そこからそれぞれの作品が仮想的に示す〈事物の記憶〉が明らかにされてゆくのである。

多数の写真理論が援用されることもまた、本論の特徴である。たとえば「影」では写真を「光の化石」と述べた森山大道の発言が引用され、感光剤を石に塗布することでそこに落ちた影の視覚像を固定する、著者の作品の特質が説明される(第2章)。あるいは望遠鏡や虫眼鏡など「レンズ」を用いる器具に感光乳剤を塗布して、その観察対象と想定されるものの画像を固定した作品について、クラウドを経由しつつ対象物の存在なしではその意味を発揮しない言語記号、すなわちローマン・ヤーコブソンのいう「転換子」概念を援用することで、その特質が明らかにされる(第6章)。

そのほかジェフリー・バッチェン(第3章)、ロラン・バルト(第4、5章)などの写真にかんする考察が多数引用されるが、著者の主要な問題意識はそのなかで一貫して、このようにしていれば「写真となった」諸事物が作者あるいは撮影者という「主体」を離れ、それ独自の「記憶」を持つに至るかという点にある。これを自作の展開に合わせて多角的に論じることで、本論文は「事物が主体となる世界」への洞察を含むことになる。

以上のように〈事物の記憶〉という問題設定と、その問題を写真術の原理で解決しようとした点に本論文の独自性を見出し、この点において本論文を博士論文として所定の基準を満たすものとする。

(作品審査結果の要旨)

鈴木のぞみはこれまで日常的な事物に写真の感光性を与えてイメージを定着する手法で制作を重ねてきた。窓外の風景を焼き付けられた窓ガラス、室内の光景が写しとどめられた鏡といった作品はヴァナキュラー写

真が参照されている。単に鑑賞の対象としてのイメージではなく、装身具やレリーフで加工されるヴァナキ
ャー写真は物質的で触覚的な存在であり、所有者との間に濃密な関係が保たれ、記憶という要素が大きな
意味を持つ。鈴木はそれを見つめる人間の記憶だけではなく、人間と時間を過ごした事物の側にも記憶があ
ると仮定し、その可視化を試みているのである。

論文「事物の記憶—事物が孕む潜像を顕在化させる媒体について」では、写真の原理を通して事物の記憶を
顕在化しようと試みた自作について検証が行われている。私たちの身の回りでは小穴投影現象、投影、反射
といった物理的現象によって、さまざまな像が結ばれている。それらを感光材料で露光しても、現像処理が
済むまでは「潜像」であり、見ることができない。鈴木は、存在するが目には見えない潜像に記憶のありよ
うを引き寄せて論考を進める。本論文では、これまでに制作された作品よりも更に事物側に重心が移動し、
事物が主体となる世界と、そこで事物自身が記憶を持つことが仮想されている。

さらにロザリンド・E・クラウスの「指標論」を参照し、これまでに制作した自作の支持体を「影」「穴」「鏡」
「窓」「ガラス」の5つに分類して考察をすすめる中で、作家という個人的な人為によらない痕跡、私たちの身
の回りで結像し、遍在する像としての写真に〈事物の記憶〉が表出する可能性を探っていく。その上で、ス
テレオ写真のような商業的な写真における作者の匿名性、アジエの写真に見られる目録的性質に注目し、
作家個人の自己表現を超えた地平に事物の記憶としての写真像を見出すに至る。博士展提出作品《The Rings
of Saturn》では、作家個人の意識のみならず、事物にまつわる個別具体的な経歴も超えた、時代の集積的無
意識への接続が試みられている。私たちの生活における身近な事物にも記憶が遍在すること、その表出にお
いて写真が機能的にも近似性を持つことを考察し、人間を中心として構築された世界を見つめ直すことで、
新たな視点を模索する作品であることを評価し、博士号に値すると判断した。

(総合審査結果の要旨)

鈴木のみは、学部時代に絵画を学ぶものの、次第にコンセプチュアルな表現を思考し始め、写真技術による
表現を手がけるようになった。それは一貫して身の回りにある食器や什器といった物に備わった隙間、穴
から漏れ出る光によって描き出されるピンホール現象によるイメージを想像し、定着することである。鈴木
は一貫して乳剤を物質に塗布することにより、イメージを定着させる。鈴木によれば、それは予め事物が孕
んでいる潜像と捉えられる。

博士論文ではそういった表現を『事物の記憶—事物が孕む潜像を顕在化させる媒体について』と題して、
写真表現に特有な原理を写真黎明の写真史の側面から説き起こすところから始めた。そして作者のではなく
既に事物に備わった条件を作品の要素とする表現を写真表現の最大の特徴とし、予め事物に潜んだ性格を発
見することに最大の意義を見出す。修了作品は、《The Light of Other Days》《Other Days, Other Eyes》
と題された2種類となり、窓や望遠鏡などのかつて使われていた道具に乳剤を塗布してイメージを焼き付け
た物で英国滞在時に制作した作品を提出した。

写真とは自然によって自動筆記された客観的な媒体である、とする立場からロザリンド・クラウスの「指標
論」を援用し記号として対象を指し示すことを明らかにする。そしてジョゼッペ・ペノーネの作品を例とし、
光の化石を発掘するような行為が鈴木にとっての写真であるとする。さらに中平卓馬の「事物の見返す視線」
という言葉や、アンリ・ベルグソンの「世界はすでにあらかじめ写真として撮影されている」という言葉を引
用し、〈事物の記憶〉として、事物が見ていたであろう対象物を、時代の目撃者として人間が推測する行為は、
すなわち人間が事物のように世界を見ようとする態度であるとする。事物が記憶と眼差しを持ち作者を見つ
めているという思いは、つまりはそうであろうと人間が想像することである。その事が意味することは最終
的に人は常に世界に見られていると言うことを自覚することとなる。

一貫した制作態度による修了作品とともにそれを裏付けようとする論文、ともに博士修了として申し分な
く優秀であり、合格とした。